

沖縄でワーケーション 「神の島」を堪能する旅

Go Toトラベル事業が始まった。緊急事態宣言が解除されてからも続く自粛ムードで移動や行動が制限されているストレスもあり、リフレッシュもかねて「旅」に出たいと思う人も多いはず。では今、安全で安心な旅はできるのか。沖縄でのワーケーションを求め、コロナ時代の旅に出掛けた。

空港、機内、観光地の
感染対策は万全か？

10月中旬、羽田空港の第2ターミナルは、コロナ前ほどではないものの活気が戻っていた。那覇に向かうANA機内で搭乗客を出迎えるCAは、マスク姿で両手には手袋を装着している。当分はこれが当たり前の光景になるのだろう。機内の換気は上空の空気を取り込み、約3分で機内すべての空気が入れ替わる。フィルターには病院の手術室の空調設備に使用される高性能のものが採用されており不安はない。筆者が搭乗した時の機内サービスの選択肢は、ベトトボトルで提供される冷たい水かお茶、子ども向けにはりんごジュースのみだったが、10月20日以降はコンソメスープ、ホットコーヒーが提供されるようになった。少しずつだが戻っているサービスもあるようだ。

機内の窓から外を眺めれば眼下には雲海が広がる。忘れていた旅の高揚感が戻ってきた。

那覇空港に到着してから、空港で目に入ったのはサーモグラフィ。沖縄県は離島が多く、それらの島は



「神の島」といわれる久高島

医療体制も脆弱なため、抜かりのない水際対策が求められる。到着口を抜けると、東京はすっかり秋模様というのに、沖縄の太陽は夏のように照り付けている。その強い日差しを浴びながら本島南東部にある南城市へと向かった。

今回、旅先を沖縄本島の南部にある南城市にしたのには理由がある。沖縄本島は北部地域が観光の中心だが、南部にも琉球文化が色濃く残り、あまり観光地化されていないこともあり、リピーターには南部が人気だと聞いていたからだ。さらに、琉球開闢の地であり、「神の島」と呼ばれる久高島に行きたいという願望もあった。新型コロナで世の中が激変



ユインチホテル南城のワーケーション用ラウンジ

するなか、久高島でのひとときは自分と向き合う良い時間になるのではとひらめいた。旅の魅力のひとつに、自分を非日常の世界に置いて日常を客観的に見ることがあるが、神の島なら申し分ない。

南城市に入り、まず訪れたのは世界文化遺産でもある斎場御嶽。琉球王国の最高の聖地といわれるこの聖なる空間は、昔も今も祈りの場所だ。かつては首里城から琉球の国王が訪れ、創世神アマミキヨが降り立たとされる久高島に向かって祈りをささげた。筆者も斎場御嶽で祈った後、宿泊するユインチホテル南城に向かった。沖縄の赤瓦と白壁が印象的なホテルで、太平洋側の中城湾が望め

る。那覇からのアクセスもよい。隣接する南城市役所は公共バスの起点であり、那覇市内のバスセンターとも直接つながっている。

行動が制限される今こそ「旅」は多くを与えてくれる

では、同ホテルでは何不自由なく仕事ができるのか。ホテル内にワーケーション用のラウンジがあるため行ってみた。見た目は良くてもネット環境やプライバシー面で使いづらいワークスペースは世の中に多く存在する。しかし、このラウンジは快適にオンライン会議ができる通信環境が整い、背の高い座席を利用すれ

ば背後からPC画面を覗かれる心配はないなど、プライバシー面の配慮もされている。さらに座席2つを使えば、周囲から隔たれた空間が生まれ、集中して仕事ができる。しかも目の前は絶景だ。アイデアだっどとんどん浮かぶはず。ちなみにこのラウンジ、19時からはアルコールも提供され、大人の時間を過ごせる。まさか沖縄で温泉に入れるとは思ってもいなかったが、夕食後には源泉かけ流しの天然温泉につかった。砂川卓郎総支配人によれば、3万5千坪という広大な敷地内にあるスポーツ施設を利用したウエルネスツーリズムにも力を入れているという。

経営母体である県内企業のタビックは医療法人でもある。療養を行えるリゾートは需要も多いはずだ。

翌朝、ホテルから車で20分ほどの場所にある安座間港から、高速船で久高島へと向かった。所要時間は約15分。サンゴ礁が隆起した平らな島が見えてきた。そして周囲わずか8キロメートルほどの神の島にも観光客が戻っていた。

島には観光施設はない。島民が祈りを捧げながら守ってきた自然と人の営みが最大の観光資源だ。そのため観光客には信仰や伝統文化を尊重する態度が求められ、島の石ひとつ持ち出してもならないし、泳ぐ場所も決められている。

ガイドしてもらい、島民をはじめとする沖縄の人々が大事に守ってきたものに触れた。短い滞在であったが島の風に吹かれながら、自分を見つめなおす機会にもなり、何より最高の安らぎを得られた。

飛行機の時間もあり、名残惜しいが東京に戻るため空港に向かう。途中、せっかくなので沖縄にきたのだからと、沖縄の名店88ステーキ本店に向かい、テンドーロインステーキの300グラムをいただいた。東京でこのボリュームの肉は食べきれないが、ボリュームの肉は食べきれないが、沖縄だとなぜかペロリと平らげしまう。くどくないのだ。沖縄の人が夜のメにステーキを食べるといっても分かる気がする。

今回は1泊2日の駆け足旅だったが、日中は仕事をしたり、有給休暇をプラスしたり、あるいはワーケーション制度を活用すれば、もっとゆつくりと神秘的な久高島を楽しめるのだろう。島の空気、海からの風など、実際に旅をしなければ感じえないものをじっくり味わいたい。秋が深まり冬を迎えるようとする今、自分を見つめ直す旅に出るのはいかがだろうか。



久高島の北東にあるカペール岬に続く道



88ステーキ本店のテンドーロインステーキ

銘武良さんにアマミキヨが上陸したという伝説があるカペール岬や、桃源郷「ニライカナイ」から五穀の種子が入った壺が流れ着いたとされるイシキ浜などを